

本田菊が数学教員であるギルベルト・バイルシュミットと出会ったのは十年以上前の夏のこと、そのとき彼は三高の二年生だった。

二条城を更に北上した場所にあるギルベルトの家のすぐ横は竹林で、電柱よりも背の高い竹が何本も風にしなり、高い音を立てながら揺れていた。指定されたのより少し早い時間に到着した菊が戸口の前で声を上げると、引き戸はすぐに開かれた。緊張した面持ちで己を見上げる彼を見て、ギルベルトは不思議そうに首を傾げた。

「……他の奴らは？」

「は」

固まったままの菊を見下ろしながらギルベルトはしばしそのまま首を傾げていたが、やがてまあいいか、と一人頷き、体を翻した。家の中へ戻る彼の背を追い、菊はおずおずと家の中に足を踏み入れた。

（普通の家だ）

靴を脱ぎながら思う。ドイツから来た外国人教師の家であるからにはドイツらしいものでも置かれていたりするのではないかとひっそり期待していたのだが、そんな気配はどこにもない。それでも色褪せた絨毯の感触は今住んでいる家のそれより少しふわふわしている気がした。上背の高い家主は菊の少し前を、僅かに首を屈めながら進んでいく。

通された書斎は畳敷きで、窓側に敷かれた敷物の上には洋

風のどっしりと重たげな机が置かれている。入って左側の壁一面は本棚、ちらりと見たその中に文芸春秋社による箱入りの歳時記が五冊、ずらりと並んでいるのが目に入って、菊はぱちりと目を瞬かせた。春は黄緑、夏は銀鼠、秋は朱色と。季節ごとに表紙の色を変えたそれは菊が書店で何度も手にとつては金額を理由に棚へ戻していたものだった。

「ほれ、そこ」

「あ、有難うございます」

置かれた座布団の上に腰を下ろせばギルベルトもどかりと座る。口さがない生徒たちが赤目と仇名する由来であるところの紫がかった瞳が正面からじろりと菊を睨んだ。

「さて」

ちぢこまった菊にギルベルトが言う。それで、どいつが首謀者だ？

その頃、菊の学年ではモールス信号が流行っていた。

確か軍人の兄弟から教えてもらった学生がいて、それで広まったのだと思う。授業の合間にクラスメートたちは競い合つて信号を覚え、その内にちよつとした会話さえするようになった。鉛筆や箸で机をツイー、ツイー、と叩くのだ。

級友たちに比べても菊のモールス信号の習熟は早い方だった。おつとりと柔らかな京都の言葉は他県出身の菊にとつては二年生になつても未だどこかよそよそしく、かといつて地

元の言葉を押しとおし続けるのも気後れするばかりであったので、声に出さずに会話することは気楽で楽しいことだった。厄介だったのはそれが丁度、期末試験の直前であったということだ。近くの席に座っている級友から、信号で試験の解答を教えてほしいと言われたのを菊は断ることができなかった。

おい。自分が何をやったか、分かっているな？

誰にもばれなかった、そう思っていたのに。試験も終わり解放感に溢れた教室の中、最後の科目で試験監督官をしていたギルベルトは退室しようとした菊にすれ違いざま、小さな声でそう囁いたのだった。

「おい」

「……言えません」

小さな声で言うのと正面からの圧力はますます重くなった気がした。

三校の級友たちの多くは大企業や大学教授の息子だ。そんな彼らに自分達のやっていることがばれたと、だから一緒に外国人教師の家に来て欲しいなどと、菊には言えるわけもなかった。

「……他の奴らはお前だけ行けて言ったのか」

「いえ」

「じゃあお前が、お前ひとりでここに来ることに決めたってことか」

俯いたままであれば深い溜息が落ちた。

「お前さあ」

「はい」

「友達少ねえだろ」

ひゅ、と菊は息を呑み込んだ。

「……あーいや、なんだ、そういうことが言いたいんじゃないか」

呻き声と溜息の中間のような音がぼたりと落ちる。と、ふいに視界の中心に人差し指がぬつと映りこんできて菊はぎょつとした。言うまでもなくギルベルトの指だ。

た、た、た。た。たん、たん。た、たん、た、た、た、た。

た、た。たん、たん、た、た、たん、たん、た。

た、た、た。た、たん、たん、た、た、た、た、た。

たん、たん、た、た、たん、たん、た。

「……ご存じなんですか」

「おお、やつと返事したか」

ぼかんと呟けばほつとしたような声が返り、菊は顔を上げた。視線が合うとギルベルトはにっこりと唇を釣り上げた。お前の通信を見破ったんだ、当たり前だろ。それに、お前の通信は聞き取りやすい。

「で？」